

「私たちの十五歳の頃」

東日本大震災から5年目に入ります。私たちの住む会津地域には双葉郡から多くの人が避難してきました。私たちは、生まれた土地に育ち住んでいます。いま避難している人には、「ふるさと」はいまだ遠くにあります。

今回、大熊町地域学習応援協議会の事業として、大熊のみなさんの十五歳のころを聞き書きしました。それは、大熊の子どもたちに地域の事、そこに住んできた「思い」を理解して欲しかったからです。

この事業は、会津大学短期大学部の学生と、特定非営利活動法人寺子屋方丈舎のスタッフが聞き書きを行いました。大熊の子どもたち、そして、地域のみなさんの何らかの記録になれば幸いです。

主催…大熊町地域学習応援協議会

2014年(平成26年度)文部科学省

学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業(委託事業)



語り手
末永精一さん
(80歳・熊町)

人とのつながりでのり越える

前に住んでいた大熊町には9つの集落があつて、みんな農業と漁業をしながら生活してたなあ。子どもの頃は田んぼとか家の仕事を毎日手伝つてた。田車を押したり、稲刈りをしたり。あとは友達と一緒に風呂の水汲みに行ったりもしたなあ。大変だったというより、それが当たり前。何かあると集落のみんなが集まって協力しあいながら生活してきた。

い町だったけど、東電のおかげで恵まれた部分もあつたんだよ。

震災があつてから会津に避難してきたけど、最初は荷物もなんにも持たないで訳もわかんねえまま逃げてきた。お年寄りからバスに乗れーつつうんで、家族もバラバラ。家もきれいなまゝに残してきた。

戻りたいかつて聞かれたら、会津もいいところだけど、昔のことを思うとやっぱり過ぎやすい故郷に戻りたいつつう気持ちはあるよ。ここは雪がすごいし。あつちは全然降んねんだ。何より、大熊町はほんとにいいところだから。それに、家族みんなで暮らしたいしなあ。今は夫婦二人で生活してるけど、孫の成長が楽しみだ。一番上は成人式に行つたし、今受験生もいる。大学生で、離れて暮らしてる孫もいるよ。

これからの生活ねえ。鮭の養殖は昔からやつ

田んぼ仕事が機械化になる前は3、40人に頼んでやつてたよ。体育祭なんかもあつて、声を掛ければみんなが集まっていろいろやつた。でも小学校4年生の頃なんていうのは戦争中。友だちとの遊びは戦争ごっこだったし、小学校でも防空壕に入る練習もした。

近くに飛行場なんかもあったからアメリカ軍から狙われて。あの光景(空襲)見た時はほんとおっかなくなつちまつて。でも、困った時はみんなで助け合つて乗り越えてきたなあ。

東電の原発ができるまでは東京の方にみんな出稼ぎに行つて、四国まで行つたこともあつた。今と違って日給が9000円ぐらいだった。朝から晩まで丸一日働いてやつと9000円。今は時給がそんぐらいだから、全然違うよなあ。東電ができてからは出稼ぎに行くことは無くなつて、東電で働く人がほとんどだった。貧し

てるよ。昭和21年から始まつて、福島県でも3番目の回帰率。だいたい2万匹近く戻つてくるのかな。今は海で捕らないから、よけいに多く戻つてくるっていうのもあんだよなあ。だから、これからも「つくる漁業」を続けていかないといけない。

あとは、今はここで夫婦二人暮らしてしょ。健康でいたいよね。大熊にいた頃は忙しかつたから無かつたけど、今はなんにもすることがないからけんかばかりだよ。でも、今まで支え合つてきたからね。健康第一で、これからも2人で支え合いながら生活できたらいいね。



聞き手
歌川瑞季さん
(会津大学短期大学部
社会福祉学科2年)

末永さんのお話は勉強になるものばかりでした。人と人とのつながりを大切にしたいと改めて感じました。ありがとうございました。